

意味の形式化 —その二—

山下 淑子

I

二十世紀の意味論の発展のあとをたどってみると、意味の関係をいかに理論化するかということに焦点がおかれているように思える。Ullmannがその著 *The Principles of Semantics*⁽¹⁾ で述べているように、Saussure以降の synchronistic semantics (共時的意味論) は、単・複の semantic relationship を取扱い、これは Saussure 以前、主として意味変化を取扱った diachronistic semantics⁽²⁾ (通時的意味論) に相対するものである。Saussure の言語理論や、ゲシュタルト心理学の影響を受けて、「全体の中の個」という考えが、そのまま意味の研究にもとり入れられ、Trier は semantic field (意味分野) の理論⁽³⁾ を展開した。Trier はモザイクのように並んだ語と語の諸関係をしらべて、一つの語がもつ意味の広がり領域をきめたのであった。彼はドイツ語の知識に関する概念の世界を分割している語について1200年頃には *wisheit, kunst, list* があり、1300年頃には、*wisheit, kunst, wizzen* があったことを調べ、それぞれの時期に三語の間にもどのような“なわばり”があり、どのような関係が保たれていたかを明らかにした。即ち、1200年頃、*kunst* は社会行動を含む高度な、又宮廷で使われた知識を意味し、*list* はもっと低い、技術的な知識の意味を含む語として使われ、*wisheit* は前二語の代用として使われる他、両者を綜合した知的、道徳的、宮廷的、美的、宗教的な知識をあらわす語として用いられたのであった。1300年頃には、*wisheit* は、もはや百年前のように総合的な意味では用いられなくなった。世の中は全く宗教色が濃くなり、宗教的ということは特別な意味をもたなくなった。*Kunst* からは、宮廷的、社

会的な含蓄が消え、三語がそれぞれ占めていた領域が変わった。このようにして「知識」に関する語の間の関係は、時代の推移と共に、社会の情勢の変化により変わったのである。Trier は名詞だけについて、その間の意味関係を明らかにしたのであったが Porzig は、動詞と名詞、形容詞と名詞について、その間の意味関係を明らかにしようとした。即ち、ドイツ語で *gehen* (vs. *fahren*) といえば「足」を予想するし、英語の *grasp* は「手」を、*blond* は「髪」を予想するというわけである。

このような意味の関係を重んずる考え方はその後の structural semantics の発展に大いに影響を及ぼして居り、Lyons, Weinreich 等の理論の底流となっているといえよう。Lyons はその著 *Structural Semantics* で Plato のテキストを corpus としてギリシャ語の或る特定の語についてその領域を調べ、基本的な意味関係を incompatibility, antonymy, hyponymy, synonymy に帰するよう試みている。Incompatibility とは、例えば *She wore a red dress.* という文は *She wore a green (blue....) dress.* という文を否定して居り、*red, green, blue* は incompatible な (相容れない) 関係にあるといえる。Antonymy は段階の有無によって、正反対の場合と *bigger than* のような場合がある。Hyponymy は、例えば *scarlet* は *red* の hyponym である。Synonymy は類義語である。

Firth は “Modes of Meaning”⁽⁴⁾ という論文で collocability について述べているが、これは文中の語と語の syntagmatic relation という横の関係を考える時、非常に重要な点である。これに対し前に述べた vocabulary 全体の中での語と語のいわば縦の関係は paradigmatic relation であるといえよう。この縦横二つの軸は、phonological, grammatical, semantic 各 level に於いての単位同志の関係を論ずる時、基底となるものであることは明らかである。Firth は collocability をテストする文の一例に次のようなものをあげている。

- (i) An *ass* like Bagson might easily do that.

- (ii) He is an *ass*.
- (iii) You silly *ass*!
- (iv) Don't be an *ass*!

この中で *ass* のもつ意味の一つは、modern colloquial English で *you silly* (や他の要素) との habitual collocation によって示されることを述べている。

以上はドイツ、イギリス等ヨーロッパで行われてきた意味の研究の方法を意味関係に焦点をおいて考えてみたものであるが、アメリカに於いてはこの点どのように発展しているであろうか。

Anthropology (人類文化学) の発展と相まって顕著なものとなってきた方法論に componential analysis というのがある。これは約言すれば、語の属性分析といえよう。関連をもつと思われる語の間で、それらと比較することによりその特徴となっている要素を抽出する方法で、主として血族関係のことは、格をもつ語、人称代名詞等に適用出来る。中でも kinship system の分析はこの方法に特に向いているようであるし、一番進んでいると思われる。例えば、*father* は semantic component $S_1G_2L_1$ と表わされ、*mother* は $S_2G_2L_1$ と表わされる。S は sex を表わし、 S_1 は male、 S_2 は female である。G は generation を表わし、 G_2 は ego から一世代上の意味である。L は lineality を表わし、 L_1 は ego の直系祖先、子孫であることを示している。この componential analysis は Jakobson をはじめとして、Harvard, M.I.T. グループを中心に研究がすすめられている、Distinctive feature analysis が、semantics の level で行われていると考えてよいだろう。Componential analysis はヨーロッパで有力であった semantic field の考え方と同じく、語と語の paradigmatic relation を明らかにするものである。Firth のいう collocability の所で指摘した syntagmatic relation の追求は Katz-Fodor の論文^[5] にその発端がみられ、Weinreich の研究^[6] はそれを一段と進めたものであるといえよう。

Katz-Fodor は “The structure of a semantic theory” の中で、文中の語と語がどのように結びついて解釈が生まれてくるかを形式化しようとし、意味論の要素に、辞書とプロジェクション・ルールの二つを設定して、この二つの要素の amalgamation のプロセスを厳密な形式で表わした。この Katz-Fodor の研究は、それ以前、語の意味の paradigmatic relation と syntagmatic relation が別々に研究されていたものを一つの理論の中で総合的に表わそうとしたものだといえる。ヨーロッパの semantic field theory (除 Porzig), アメリカの componential analysis は、一つの語の中にどれほどの属性が含まれているかの分析であり、Firth 等⁷⁾の研究は、context を中心としたものであった。Firth の collocability という術語を借りるならば、これはすぐ隣合せの modification から、文中の離れた要素同志の各種の agreement, 又より大きくは、一つの文と他の文との連結、関連に至るまで考えられる。英語でも、日本語でも、広義の collocation に於ける制約は色々と考えられ、Katz-Fodor が <selection restriction> と名づけたものを、辞書のエントリーの末尾に記すことが出来れば native speaker の語感をもたない外国人が、外国語を習う際、非常に助けとなるであろう。こういった制約を日本語で考えてみると、先ず敬語の使い方に於ける多大な制約が目につく。話し手と相手と話題になる人の上下関係が、微妙に複雑にからみ合わされて、適切な代名詞、動詞等が選択されねばならない。第二に、日本語に豊富な onomatopoeia の表現はどうであろうか。「サラサラ」、「ザーザー」、「カリカリ」、「ドンドン」等が特別なニュアンスを伝えるのも、適切なことばえらびによるものである。英語では、文と文をつなぐ *however, consequently* 等の使い方は、広義の collocability にならなかったものでなければ、せつかく logical であろうとする英語の趣旨に反することになる。ことばが、このような制約を守る時、文法にかなった、常識的に辻褄の合う意味を伝達することが出来る。しかし、ことばは時としてノルムをはずれた表現をする。思想の断片を並べた詩、

意味の形式化

奇異な文体を誇る小説、意識の流れをそのまま表わしたモノローグ等々—これらはいかにことばのおきてをおかしていようと、美の表現ともいえようし、読む人に何らかの意味を伝えていることに変わりはあるまい。このような意味関係をも取扱おうと試みたのが Weinreich であった。

Weinreich は Katz-Fodor が、すべての amalgamation を同種のプロジェクトション・ルールで説明したことを批判し、意味関係を、Linking, Non-Linking という考えで表わそうとしている。Weinreich の考え方によると、Linking, Non-Linking という関係を、単語の semantic component 同志と、文中の要素同志に適用させようというのである。即ち、語の paradigmatic relation にも、syntagmatic relation にもあてはまるということである。語にいくつかの semantic features がある時、その feature 間に ordered と unordered の関係があり、ordered の方を cluster (Non-Linking) とよび、unordered の方を configuration (Linking) とよんでいる。例えば、*daughter* という語は、'female' と 'offspring' という semantic components をもって居り、このいずれの要素も先にきてよいが、*chair* という語で 'furniture' と 'sitting' という components の順序は大切である。英語の constructions からみると、Linking に入るものは、Subject Noun と Main Verb, Subject Noun と Predicate Noun 或いは Predicate Adjective, Main Verb と Manner Adverbial, Descriptive Adverb と Adjective 等がある。Non-Linking constructions は更に Nesting, Delimitation, Modalization に分かれる。Nesting には Main Verb + (Object) NP と Preposition + (Object) NP と種々の Complements や *walk home, reach America* 等の Temporal, Locative Phrase が入る。Delimitation には、Quantification や Deixis 等が入る。Modalization には *so-called, like...* 等の表現が入る。Modifier と Head は Linking と Non-Linking の場合がある。Weinreich の説では、この他、Semantic Calculator, Semantic Evaluator 等という Semantic Process が Grammatical Process 終了前に作用して、deviant

utterances をも生み出す点、Katz-Fodor の説とは大いに異なる^⑧。

以上、semantic relation に対する考え方を中心に述べてきたのであるが、文学作品に於いて意味の解釈がどのような過程を経てなされているか、その一例として、色の含意 (connotation) について以下述べてみたいと思う。

II

人々が心に描く imagery (心像) は、さまざまであるが、Peter Mckellar の *The Investigation of Mental Images*^⑨ によると、視覚による imagery が最も多く、強烈であることが実験の結果明らかにされている。

色 (colour) に関する imagery を使った表現は、英語にも日本語にも多くみられ、昔から文学作品にも多く使われてきたところであるが、ここでは、日英両語の色のもつ connotation について考えてみたいと思う。

Shakespeare の *The Second Part of King Henry the Sixth* (iii 3. 23) によると、次のようなところがある。

King. O thou eternal mover of the heavens,
 Look with a gentle eye upon this wretch!
 O, beat away the busy meddling friend
 That lays strong siege unto this wretch's soul
 And from his bosom purge this *black despair*!

最後の *black despair* は metaphor であり、black は物理的な色の表現 *black sweater* の black と異なることは明らかである。colour imagery はこのように collocation によるものが多く、修飾語として用いられた colour に関する語が、次にくる語と密接な関連をもった意味を含蓄しているのである。上の *black despair* では、英語においても、黒色は、暗い希望のない状態をあらわしていることがよくわかる。他に、*black as Hell* のように simile の形式をとるものもある。このような含蓄をもつ colour の比喩

意味の形式化

的表現を集め分析してみると、或る程度迄その語のもつ意義素 (distinctive feature) というようなものを抽出することが出来る。勿論 imagery の使い方は、作者によって異なる場合も多くこのような主観的なものを手がかりとして、そのことばの意味を決定するのは危険な面もあろうが、その中でも色々共通した要素があることは興味深いことである。

色の分け方は言語によって異なり、こまかく分ければ、英語で三千にも及ぶ色の名があるそうであるが、ここでは、英語と日本語で最も普通に使われている七色に限ってみたいと思う。

先ず赤 (red) をみてみよう。英語では、convulsed with *red* rage, *red* as love, *red* as hate, *blood-stained sword* (revenge), a *bashful rose*, the *red* waste of his youth, *scarlet sin* 等があり、Sentiment (rage, love, hate, revenge, bashfulness) と Moral (flagrancy, offense) に関する表現がある。日本語で「赤くなる」という表現は、怒り、恥、愛情などの感情表現とみられ、この点英語と共通するところである。この他、「真赤な嘘」、「赤の他人」、「赤裸裸」、「赤心」等があるが、これは utterness, frankness をあらわすものといえよう。心理学的にみると、赤から連想されるものは、血、熱、火等で一般的に赤は passion, excitement, action, fierceness の印象を人々に与えることは、裏付けられるようである。

次に黒 (black) をみてみよう。They were all *black* strangers to me, *black* as despair, *black* as Hell, *black* heart, *black* deed, *black* and white, *black* magic, the *black* art 等があり、utterness, hopelessness, death, wickedness, badness, bane 等を表わすといえよう。日本語でも、黒は邪悪、死に関連した表現が多く、中でも「黒幕」、「腹黒い」、「黒白をつける」、「黒枠付の写真」、「黒服」等はよく使われるものである。心理学的にみると、黒は夜、死、魂の否定、不吉さ、失望等との連想が強く、日英両語で類似した含意がでてきたのもうなずける。

白 (white) に関しては、黒と対象的に使われる例が多い。*White* magic,

white lie, *white-robed innocence*, as chaste as unsunn'd *snow* 等は、その代表的なものであり、*benevolence*, *innocence*, *chastity* 等を表わしている。日本語では、「潔白」、「白むく」、「青天白日」等、*innocence*, *chastity* を表わすものはあるが、*white lie* (つみのないうそ)、*white magic* に当るいい方はなく、又、英語にないものに「白眼視する」、「白屋」等がある。心理学的にみると、白は *coolness*, 雪等との連想が強く、*purity*, *cleanliness*, *brightness of spirit* 等の印象を与えるので、上記の表現があらわれるのも自然であろう。

次に緑 (*green*) はどうであろうか。To look so *green* and pale, a *green* goose, a *greenhorn*, *green* as hope before it grieves. 等あり、*bloodlessness* (*weakness*), *immaturity* (*youth*), *hope* (*flourishing*) 等の含意をもつようである。日本語でもこのような表現はあり、「顔が青い」(気分が悪い)、「青二才」、「青春」、「青臭い」、「青瓢箪」等である。日本語では、青を *green* と *blue* の両方に使うが、この例では、すべて緑の代りに青が使われているようである。心理学的にみると、緑は *coolness*, *nature* との連想が強く、新鮮さと静けさの印象を与える。

青 (*blue*) は、She was *blue* and lonesome and half sick, a *blue* Sunday by local option のように *melancholy*, *indecency* をあらわすものがある。日本語でも、詩の一節に、「憂いは青し空よりも」、「青息吐息で」等の表現がある。青の心的連想は *coldness*, 空、水等で *melancholy* と *soberness* の印象を与えるとされている。

黄色 (*yellow*) には、...and *jealousy*, suffused with *jaundice* in her eyes という表現が英語にあるが、*jealousy* を表わす表現は、日本語には見当たらない。他に「黄色い声」、「口が黄色い」等 *immaturity* を表わすいい方がある。黄色の心的連想は日光で、陽気さ、*vitalness*, *high spirit* 等の印象を与える。

紫 (*purple*) は、*purple* patch of writing, *purple* like that of a prelate 等

意味の形式化

brilliance (beauty), dignity 等を表わすものといえよう。日本語では、「紫袈裟」が高僧の dignity の象徴として用いられている。紫からの連想は, coolness, mist, darkness, shadow 等であり, dignity, pompousness 等の印象を与える。

以上の他に, idiom として用いられているものに, a red signal, a green signal, red cent, yellow journalism, blue stocking, blue-blooded, the black market 等があり, 日本語でも, 「赤信号」, 「青信号」, 「赤本」, 「黄表紙」等がある。

先に述べたように, このようにして, ことばのもつ含蓄を探ることは, そのことばの意義素を見つけ出すのに役立つといえよう。言い換えれば, そのことばを他から区別し, そのことばたらしめている特性 (distinctive feature(s)) が意義素といえよう。このような特性は, 語によって, 世界各国のことばに共通な普遍的な場合もあり, 異なる場合もある。日英両語の色に関する七語についてだけを見ても, その特性は或る程度, 探し出すことが出来る。このようにして抽出された色の含意は, 名詞との collocation において制約をもつのである。例えば, 日英どちらのことばでも, 普通の人は blue and white とか, 青白 (をつける) 等とはいわずに, black and white, 黒白 (をつける) というのは, collocation の上の制約によるもので, I で述べた文中での要素の横の関係即ち syntagmatic relation, 或いは context に関することだといえる。II のはじめにあげた Shakespeare の black despair の例にもどるならばこの二つの語から生まれてくる解釈は, 次のように形式化されよう¹⁰⁰。

Lexical String 1

Despair → Noun abstract → (Sentiment) → (Personal) →
(Prospective) → (Hopelessness) → (State) [utter loss of hope]
<(Sentiment)>

Lexical String 2

Black → Adjective → (Color) → (Blackness) [of the color black]

<(Physical Object)>

Black → Adjective → (Evaluative) → (Sentiment) →

(Hopelessness) [unrelievedly sad, gloomy] <(Sentiment)>

Black → Adjective → (Human) → [being a member of a group

or race characterized by dark pigmentation] <(Race)>

Black → Adjective → (Evaluative) → (Moral) → (Wickedness)

[outrageously wicked] <(Moral)>

理論上は Lexical String 2 と Lexical String 1 との間に四つの組み合わせ方が可能であるが、selection restriction (選択上の制限) が共通なものは、<(Sentiment)> だけなので、次の結合のみが可能となる。

Black despair → Noun abstract (Sentiment) → (Personal) →

(Prospective) → (Hopelessness) → (Evaluative) [[unrelievedly gloomy] [utter loss of hope]]

このようにして、black despair は terrible hopelessness と解釈されるのである。

Notes

- (1) Stephen Ullmann, *The Principles of Semantics*, 1957, Barnes and Noble, Inc., New York P. 171
- (2) Gustaf Stern, *Meaning and Change of Meaning with Special Reference to the English Language*, 1931.
- (3) Jost Trier, *Der deutsche Wortschatz im Sinnbezirk des Verstandes: die Geschichte eines sprachlichen Feldes*, 1931, C. Winter. Heidelberg,
- (4) J. R. Firth, "Modes of Meaning" *The Bobbs-Merrill Reprint Series in Language and Linguistics*, Language-20, 1951, The Bobbs-Merrill Co.,

意味の形式化

Inc., Indiana.

- (5) J.J. Katz and J.A. Fodor, "The structure of a semantic theory" *The Structure of Language*, 1964, Prentice-Hall, Inc., N.J.

Cf. Yoshiko Yamashita, "Formalization of Meaning—Part 1" *English and American Studies*, 1964. Rissho Gakuen Women's College, Tokyo

- (6) Uriel Weinreich, "Explorations in Semantic Theory," *Current Trends in Linguistics* Vol. III. (ed. Sebeok), 1966, Mouton & Co., The Hague

Cf. Yoshiko Yamashita, "A Development of Semantic Theories in the Twentieth Century" *Kiyō*, 1967, Rissho Gakuen Women's College, Tokyo

- (7) J.R. Firth, *op. cit.* (4)

Malinowski, *Argonauts of the Western Pacific*, 1922, Routledge, London
C.K. Ogden & I.A. Richards, *The Meaning of Meaning*, 1952, Harcourt
Brace, New York

- (8) Uriel Weinreich, *op. cit.* (6)

- (9) Peter Mckellar, *The Investigation of Mental Images, Penguin Science Survey*, 1965. B, pp. 79~94

- (10) Cf. Katz-Fodor, *op. cit.* (5)

Others: *Webster's New International Dictionary*; *The New Century Dictionary*; *The Dictionary of Simile*; *Concordance to Shakespeare (Bartlett)*; *Roget's Thesaurus*.